

---

# 邪剣

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

邪剣

### 【Nコード】

N5504G

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

どんな大軍でも魔物でも倒せるという剣がベラドウナの森にあると聞いた若い戦士アーノルド。早速相棒の魔法使いクリスト共にその剣を探しに向かう。しかしその森で年老いた緑竜に出会い。剣を扱ったファンタジーです。

## 第一章

### 邪剣

近頃話題になっていることがあった。それはある宝のことだ。

「何でもそれを持っていると誰にも負けないらしい」

「誰にも？」

「そう、誰にも負けないようになるそうだ」

酒場でも何処でもその話で持ちきりだった。それこそ街でも村でもだ。

「一度抜けばそれでな。ありとあらゆる相手を切ってしまうのだ」

「剣なのか」

「そうだ、剣だ」

その宝は剣なのだった。

「剣だ。それはベラドウナの森の奥深くの洞窟の一番奥にある」

「そうか。奥か」

「そこに突き刺さっているそうだ」

場所についても既にそこまでわかっているのだった。

「そこにな」

「ではそこに行けばその剣が手に入るのだな」

「そうらしい」

こう述べられるのだった。

「そして剣を手に入ればどんな相手でも倒せることができるのだ」

「どんな相手でもか」

「どんな英雄でも龍でもな」

「龍でも」

龍を倒せると聞いて心を動かされない者はいなかった。それを聞いて心を動かされない者はいなかった。それはまだ若い戦士のアーノルドも同じだった。

「そんなに凄い剣なのか」

「らしいな」

相棒の魔法使いであるクリスもその話を聞いていた。だから彼の言葉に応えるのだった。二人は今はある街の酒場で向かい合って酒を飲みつつ話をしている。

「本当に抜けばそれで一人でも大軍を相手にできるそうだ」

「大軍をか」

大軍と聞いてアーノルドはその逞しい腕を組んで考えに入った。

「龍も倒せるんだったな」

「とにかくな。無敵になるらしいぞ」

「それは凄いな」

あらためてそれに頷くアーノルドだった。

「それで場所は」

「ベラドウナの森の奥深くに」

クリスは場所についても述べた。痩せた顔にある緑の目が知的に光っている。

「どうする？」

「行くか」

アーノルドは考える顔でクリスに返した。

「森に。そして」

「剣を手に入れるのか」

「ああ。それでクリス」

己の決意を述べたうえで彼に対して問うた。

「御前はどうするんだ？」

「俺達は仲間だな」

「ああ」

「そういうことだ」

これがクリスの答えだった。

「一緒に行くさ。俺のその剣に興味がある」

「だからか」

「それだけ強力な剣だというのならな。是非見てみたい」

こうアーノルドに述べるのだった。

「是非な」

「よし、じゃあ決まりだな」

「ああ。しかしな」

お互い己の考えを述べて頷き逢ったところでクリスはふと考え込むのであった。そのうえでまたアーノルドに対して言うのである。

「おかしいな」

「おかしいって何がだ？」

「いや、何故だ」

彼は言うのだった。

「何故そこまでの剣が世に出ていないのかな」

「気になるのか」

「考えてみればおかしいことだ」

クリスが気にしているのはそこだった。

「そこまで凄いい剣なら誰かが持つているか若しくは何処かの国が宝として保管しているな」

「そういえばそうだな」

アーノルドもクリスの言葉で気付くのだった。

「確かにな。何故だ」

「しかもそんな奥深くにだ」

クリスはまた言う。

「何故隠されている？ここまでの話になっているのに」

「考えれば考える程ってわけか」

「そうだ。アーノルド」

クリスは真剣な目になって相棒に対して言ってきた。

## 第二章

「そういうことも気にならないか」

「確かに」

「だからだ。少し厄介な宝かも知れないぞ」

「厄介な、か」

「それでも俺はその剣に興味がある」

彼は言うのだった。実はクリスもアーノルドも冒険者でありそれと共にレジャーハンターでもある。宝を見つけるのは仕事でもあるのだ。

「だから行くが」

「それは俺も同じさ」

アーノルドもまた相棒の言葉に頷いた。短く刈った黒髪と引き締まった顔をしているがその顔が陽気に笑って黒い瞳からは強い光を放っている。

「戦士だしな。俺は」

「そういうことか」

「そうさ。それじゃあ」

「やはり行こう。だが」

「気をつけてだな」

「そういうことだ」

そのことを確認し合って今の打ち合わせは終わった。次の日にはそのベラドウナの森に向かいはじめた。道中で二人は彼等にとってあまりよくない噂を聞いたのだった。

「何っ、あいつもか」

「どうやらそうらしいな」

クリスがアーノルドに述べていた。二人は今広い道を歩いている。その途中でクリスがアーノルドに対して言ったのである。

「あいつも剣を手に入れようと動いているらしい」

「そうか。そりゃやばいな」

それを聞いたアーノルドの顔が急激に曇ってきていた。

「あいつが動いたってなるとな」

「ああ。赤眼のオズワルド」

クリスもまた不吉な顔でそのあいつの名を述べた。

「あんな奴にその剣が手に入ったらな」

「大騒ぎどころじゃないな。下手をしたら国が一つか二つ潰れるぞ」

「じゃあそれを止める為にもな」

「行くか」

正義感もここで加わった。とりあえず二人は悪人でもなかった。

それなり以上に義侠心やそういったものも併せ持っているのである。

「一刻も早くな」

「ああ」

こう言い合って森に向かう。ベラドウナの森は深く樹海そのものである。しかし二人はクリスの魔法による方位の確認とアーノルドが持っている精巧な地図でその樹海を先へ先へと進んでいくのであった。途中出会った熊や狼を撃退しつつ。

「何だ？この森の熊にしる狼にしる」

「ああ。すぐに逃げていくな」

「それにそれ程大きくないしな」

「性質も大人しいな」

二人はとりあえず樹海のかなり奥までこれといって手強い怪物等を倒すこともなく辿り着いたことに気付いたのである。

「マンティコアとかそういったのはいないな」

「これだけ深い森だといそうなのにな」

「全くだ」

「それには訳がある」

ところがここで何処からか声がしてきた。

「それにはな」

「んっ！？何か言ったか？」

アーノルドは最初その声をクリスのものだと思った。鬱蒼と茂った森にいるのは二人だけである。周りは緑に覆われ先は黒いものになっている。そんな中なのでいるのは彼だけだと思うのも当然だった。

「訳って何だ？」

「いや、何も」

だがクリスはそれを否定したのであった。

「それよりもアーノルド、君の方が」

「俺は別に」

「僕もだ。何も言っていないぞ」

「では一体誰が言っただんだ？」

自然とそういった話になるのであった。

「モンスターか？ だったら」

「遂に出て来たか？」

「安心せよ」

ここでまた声がした。

「この森はわしのもの。そなた達には危害は加えさせぬ」

「むっ！？ また」

「誰だ？」

「上を見ているのだ」

声はこう二人に言ってきた。

「上をな」

「上！？ まさか」

そのまさかだった。二人が上を見上げるとそこには。巨大な緑の龍がいたのであった。四本の足に巨大な身体と長い首に翼。それはまさしく龍であった。

「龍か」

「それもグリーンドラゴン」

「如何にも」

森の上を飛グリーンドラゴンは二人を見下ろしながら述べてきた。

その大きさは小さな城程はある。長い尾も爪も牙もかなりの力があ  
りそうだ。そしてそれだけではないことは二人はよく知っていた。

### 第三章

「わしがこの森の長のグリーンドラゴンだ」

「そうか、やっぱり」

「この森の」

「何度も言うがそなた等に危害を加えるつもりはない」

グリーンドラゴンはこのことをあらためて言ってきた。

「龍族の誇りにかけてな」

「だったらいいが」

「僕達も流石にドラゴンの相手はできないから」

「まずは名乗ろうか」

彼は今度は二人にこう言ってきた。

「よいか」

「ああ、それなら」

「貴方の名前は」

「わしの名はホークムーンという」

彼は二人の言葉を受け たうえで名乗ってきた。

「もう。一万歳になる」

歳も名乗ってきた。こうしてこのホークムーンという古い龍と二人は話に入ったのであった。丁度二人がいたその場に降りた龍はそこで二人と向かい合いながら話をはじめたのであった。

「そなた等がここに来た理由はわかつている」

「まだ何も言っていないけれどな」

ホークムーンの前に胡坐をかいて座っているアーノルドはホークムーンが持って来た森の果物を食べながら彼の話を聞いていた。なおこの果物は山葡萄である。それをクリスも彼と並んで食べている。

「それでもわかるのか」

「龍はある程度人の心がわかる」

「ああ、それか」

龍の持つ能力の一つである。

「それでか」

「左様だ。赤眼のオズワルドを止める為だな」

「あとその剣が欲しいってのもある」

「そういうことだよ」

クリスも述べた。心が読まれているのならと。二人はここに来た理由を彼に全て言ってしまうことにしたのであった。

「この森の奥深くの洞窟にあるその剣がね」

「欲しくてここまで来たのさ」

「ふむ、あれか」

ホークムーンは二人の言葉を聞いてまずは納得したように頷いた。深い知性をたたえたその瞳が静かに光っている。

「あの剣じゃな」

「やっぱり知っているんだな」

「うむ」

ホークムーンはアーノルドの言葉に対して頷いた。

「無論だ。わしはこの森の長だからな。あの洞窟もわしの治めるところだ」

「じゃああの剣はあんたのものか」

「いや、それは違う」

自分のものと問われるとそれは否定するのだった。

「それはな。違う」

「あれっ、あんたのものじゃないのか？」

「しかし洞窟は貴方の治めるところだと」

「それでもあれはわしのものではない」

ホークムーンはこう二人に述べるのだった。

「あの剣はな。あれはわしの治めるあの洞窟に置かれているだけなのだ」

「置かれているだけって」

「それは一体」

「あれはわしの手に負えるものではない」

二人に述べた言葉はこれであった。

「とてもな」

「あんたでもか？」

「龍でもか」

「龍とて万能ではない」

それを知っているからこそその言葉であった。

「神ではないのだからな」

「そうなのか」

「しかし」

アーノルドはその言葉に納得したがクリスはさらに彼に問うことがあった。

「それならあの剣は一体」

「あれは神のものなのだ」

「神の！？」

「そう。モートの剣だ」

ここでモートという名前が出て来た。

「それを奪ったアナトがあそこに置いたのだ。誰の手にも渡らないようにな」

「そうだったのか」

モートは死の神でありアナトは戦いの女神だ。彼等は宿敵の関係にあるのだ。

「つまりだ。あの剣は」

「死と冬の神の剣なのか」

「その通りだ」

ホークムーンは今度はクリスの言葉に頷いた。モートは死と破壊を司る神だ。悪の神々の領袖ともされておりその力は強大なものである。

「あれは世に出てはならないものだ」

「それをあんたが護っているってわけか」

「うむ」

アーノルドの問いにも頷いてみせる。

「その通りだ」

「そうか。そんなものなのか」

「わしでも手に取ればどうなるかわからん」

ホークムーンは剣呑な顔になって語る。

「その時はな」

「じゃあ人が手に取ればどうなるんだ？」

「さて」

アーノルドの今の問いに首を傾げるのみだった。

「どうなるのやらな。何しろ悪の神の所有するものだ」

「わからないのか」

「そうだ。だからこそそのオズワルドに渡すわけにはいかぬ」

真剣そのものの顔と声になっていた。

「それでだ。できればそなた達に」

「協力して欲しいと」

「そういうことだ」

「その通りだ」

二人に対して答えた。

「頼めるだろうか」

「まあ何かな。俺達もな」

アーノルドはホークムーンのその頼みを聞き終えたところで両手を頭の後ろで組んだ。そうしてそのうえで少しリラックスした姿勢で述べたのだった。

## 第四章

「正直なところあいつには渡したくはないんだよ」

「それもあつてここに来たから」

「クリスも言う。」

「オズワルドはあまりにも危険だから」

「そうらしいな」

ホークムーンはここでも二人の考えを読んだのだった。

「目的の為には手段を選ばないか」

「仲間を陥れたり何の関係もない人を手にかけたりな」

「幼い子供ですら何人も手にかけてきた」

「それもかなり残忍なのだな」

「その子供の生首を親に送りつけたりな」

「そんなこともしてきた」

オズワルドとはそういう男なのだった。

「賞金がかけてられている奴の子供をさらってだつたな」

「そうだったな。あの時は」

二人は忌々しげな表情になつて互いに顔を見合わせながら言い合つた。

「その子供をすぐに殺して首を送りつけて錯乱したところを」

「すぐにだった」

「惨い話だ。しかもだ」

ホークムーンは二人の話を聞きながらまた心を読んだ。

「その賞金がかけてられているのは政変で国を追われた貴族だったか」

「あくまで民衆の為に、国の為にと思っているな」

「政変を仕掛けたのは私利私欲しか考えていない奴等だった」

二人はこうした事情もホークムーンに対して語った。

「それでもあいつは金の為にやった」

「そして子供までだ」

「他にも悪事を色々と重ねてきているな」

「そうさ。盗みはするしエルフやホビットの村を遊びで火をつけたり」

「女の子をさらって弄んでそれから売り飛ばしたりもする」

「救われない男だな」

長く生きている筈のホークムーンですらこう呟く程だった。

「それはまた」

「そんな奴さ、オズワルドは」

「そうした男にその剣が宿れば」

「どうなるかわからん」

これが彼等が導き出した結論であった。

「だからだ。ここは是非」

「協力して欲しいんだな」

「僕達に」

「うむ」

またその話になり今度は彼等の間で頷き合うのだった。

「それでは頼むぞ」

「ああ、わかったぜ」

「こちらもそのつもりだし」

「報酬は弾む」

ホークムーンは報酬について言うのも忘れなかった。やはり長く生きているだけはある人が何によって動くのかもわかっているのである。

「黄金にしろ宝玉にしろ好きなだけな」

「また随分と弾んでくれるね」

「宝は腐る程ある」

ホークムーンは言う。龍という生き物は宝を蓄えるのが好きだ。だから彼にしろその蓄えている宝は相当なものに及んでいるのである。

「その中から持って行くがいい」

「ああ、わかったぜ」  
「そういうことならな」  
「話はこれで決まりだな」  
ホークムーンは二人がそれで納得したと見てここでこう述べた。  
「それではだ。行くぞ」  
「ああ」  
「その洞窟へ」  
「どうやらあのオズワルドという男」  
「ここでホークムーンの目が顰められた。」  
「魔術も使えるのか」  
「そうさ、奴は魔法剣士なんだよ」  
アーノルドは忌々しげにこのことをホークムーンに告げた。  
「実はな」  
「しかもかなりの手練れ」  
「クリスも言う。」  
「一人でキマイラを倒したこともある」  
「一人でキマイラをか」  
これにはホークムーンも唖った。キマイラといえば言うまでもな  
くかなりの強さを誇る魔獣である。その強さは龍にこそ及ばないも  
ののかかなりのものなのは確かだ。  
「それはまた」  
「だからさ。大抵の魔法はな」  
「使える」  
「転移したか」  
ホークムーンは気配を探りつつ述べた。  
「どうやら。もうその洞窟へ」  
「洞窟には結界とかはあるのかな」  
「一応はな」  
アーノルドの今の問いにも答える。  
「してはいる」

「けれどあいつにはってわけか」

「そうだ。感じる」

ホークムーンの目がまた顰められる。

「その強大な力をな」

「あんたの結界も通じないってわけか」

「今まさに破ろうとしている」

そのことも気配から感じ取ったのであった。

「その魔力でな」

「まずいな」

クリスはそのことを聞いて顔を曇らせた。

「だとすると今にも奴に剣が渡る」

「どうする？」

アーノルドも深刻な顔になっていた。

「このままこの森を行っても正直どれだけかかるか」

「そうだな。その間に奴が剣を手に入れるのは間違いない」

二人がそう話しているところで。またホークムーンが二人に対し  
て言ってきたのだった。

## 第五章

「誰か忘れていないか？」

「誰か？」

「そう、わしだ」

名乗りを挙げてきたのだった。

「わしがいるではないか。龍であるわしがな」

「というと」

「協力してくれるのか？」

「最初からそのつもりで来たのだが」

今の二人の多少とぼけた問いに少し拍子抜けしたような顔になったホークムーンだった。ドラゴンであつても中々表情豊かである。

「というよりはこちらから頼みに来たのだ」

「そうだったのか」

「そうだったのかも何も今までの話でわかるだろう」

こう言つて呆れた顔にもなるのだった。

「全く。よくそれで冒険者になれるな」

「いや、そもそも龍を見ることが事態が稀だしな」

「そうだ」

二人にしてみればそもそも龍が自分達の前にわざわざやって来る  
こと自体が驚きなのだった。何しろ龍といえば滅多にいないものだ  
からだ。

「そのあんたが頼みに来るとは」

「流石に思わないが」

「龍とて何かを頼む時はある」

ホークムーン自身の言葉である。

「自分一人でことを解決できそうにない時はな」

「そういうものか」

「そうだ。それにだ」

ホークムーンはまた言ってきた。

「御主等はそのオズワルドという男をよく知っているな」

「というよりかは有名な奴だ」

「当然悪い意味でだけれどな」

「そうだったな」

二人の言葉を聞いてまた頷く。

「それでは。今から洞窟に行くか」

「どうやってだ？」

「ここから洞窟までどれだけあるか」

二人は転移の魔法は使えないのだ。

「わかったものじゃない」

「何日かかるか」

「だからだ。わしは龍だ」

また自分のことを言うホークムーンだった。

「そしてこの森の主なのだぞ」

「ではどうにかなるのか？」

「貴方の力で」

「勿論だ。ここから洞窟になぞすぐだ」

断言するのであった。力強い声で。

「それこそな。瞬きする間だ」

「というとあんたは転移の魔法を使えるのか」

「当然使えるが使うまでもない」

「というと？」

「どうやって？」

「飛ぶのだ」

ここで誇らしげにその背にある翼をはばたかせた。

「これでな。この翼でな」

「そうか。それだったな」

「龍は空を飛べる」

そもそも二人の目の前に来たのも翼で空を飛んでだ。それを考え

れば自明の理であつた。

「ではそれで今から」

「あの洞窟へ」

「そうだ。二人共わしの背に乗れ」

あらためて二人に対して告げた。

「よいな。それでだ」

「ああ、わかつた」

「ならそれで洞窟に」

「ただしだ」

しかしここで彼は二人に忠告するのであつた。

「飛ばすからな。注意しておくのだ」

「それか」

「落ちれば唯ではすまん」

また二人に告げる。

「それこそな。命が幾つあつても足りんぞ」

「また物騒な話だな」

「死にたくなければわしの身体の何処かに強くしがみついておくことだ」

「よし、それならな」

「それで」

二人もホークムーンの話聞き領いた。そうしてすぐに彼の背に乗るとそのまま飛び立った。彼は本当に飛ばし瞬く間に森の上を飛んで行くのであつた。

「これが空を飛ぶということか」

「これは」

「どのような気分だ？」

森の上を凄まじい速さで飛びながら己の背にいる二人に対して問う。もう森の果てにある筈のあの洞窟がある山がはつきりと見えてきていた。

「はじめて空を飛ぶ気分は」

「悪くはないな」

「むしろかなりいい気分だ」

「そうであらう」

ホークムーンは二人の言葉を聞き誇らしげに笑った。

## 第六章

「空はいい」

「そうだな」

「そこから全てを見下ろして進むことは無上の喜びなのだ」

「あんた達はいつもこうして空を飛んでいるのか」

「如何にも」

答える声もまた誇らしげなものであった。

「その通りだ。こうしてな」

「いいものだな」

「ああ、羨ましい」

二人は素直に自分達の感想を述べた。

「こうして空を飛べるとは」

「龍とはいいものだ」

「御主達も魔法で空を飛べるだろう？」

ホークムーンは彼を羨む二人に対して問うた。

「鳥に姿を変えることもできる筈だが」

「いや、それでもだ」

「こうして空を飛ぶというのは」

「違うか」

「ああ、全くな」

「別物だ」

彼等は彼等でこうホークムーンに答えるのであった。

「何と言えはいいのか」

「まるで大空の支配者になった気分だ」

「ふふふ、そうか」

ホークムーンは今度の二人の言葉を聞きまた誇らしげに笑うのだ  
つた。

「それ程いいものか」

「できれば次に生まれる時は龍になりたいな」

「こうして空を飛べるのなら」

「龍はいい」

ホークムーンは言う。

「一度龍になったら止められはできない」

「そこまですぐいいものなのか」

「人間よりもかい？」

「人は人でいいものだ」

だが彼は人間というものを否定はしなかったのだった。

「だが。龍もまたいいものなのだ」

「そうなのか」

「そうだ。今度生まれ変わったら龍になってみるといい」

これが彼の考えであった。

「そうすればわかる」

「そうか。では今度はな」

「そう神様に願ってみよう」

「うむ。それでは着いたぞ」

話しているうちにだった。

「ここだ」

「ああ、もうか」

「早いな」

二人もその山に着いて思わず声をあげた。そこは森の終わりにありすぐに山脈がはじまっていた。その入り口にある洞窟であった。

二人とホークムーンはその洞窟の前に降り立つ。その洞窟の入り口はかなり広くホークムーンの巨体でも優に入られる位だった。クリスはその巨大な洞窟の入り口を見て言うのだった。

「ここだよな」

「そうだ、ここだ」

ホークムーンはそのクリスの問いに答えた。洞窟の入り口は上も下も白い岩石が見えるがその先は真っ暗になっていて見えはしない。

「ここの奥深くにその剣がある」

「モートの邪な剣が」

「残念だがオズワルドはもう中に入っている」

「ああ」

アーノルドが彼の言葉に険しい顔で頷いた。

「そうだったな。もうな」

「それももうかなり先に言ってしまったている」

「じゃああいつが剣を持っていてもおかしくはないってことだな」

「むしろそう思ふべきだ」

「そうだな」

「確かに」

二人はホークムーンのその覚悟を決めている言葉に対して頷いた。

「時間を考えればな。やっぱりな」

「そう思ふべきだ」

「オズワルドの強さはかなりのものなのは聞いた」

ホークムーンの言葉には最早何の余裕もなかった。

「そしてあの剣はだ」

「龍すらも倒すか」

「それだけではない」

その龍である彼の言葉である。

「国すらも一日で滅ぼしたことがある」

「国を滅ぼすつてのは聞いていたが」

「一日なのか」

「そうだ。一日だ」

この一日という時間が彼等の中で繰り返され強調されていく。まるで聖典の言葉の如く。

「一日で滅ぼしたのだ。一人残らずな」

「だとするとこりやまずいな」

「僕達も腕には自信があるが」

「しかしだ。止めなければならん」

ホークムーンはまた覚悟を決めている言葉で述べた。

「あの男だけはな」

「さもないと世界がつてわけか」

「そうだ。モートはその剣で多くの国を滅ぼしてきた」

今度は国を滅ぼしてきたということが述べられた。

「それがまた世に出れば」

「しかも操るのがあのオズワルドなら」

「想像するまでもないということか」

「何があっても止めなければならん」

彼等はそれぞれ述べた。

「だからだ。行くぞ」

「ああ、わかつてるさ」

「何があってもな」

彼等は意を決して洞窟の中に入った。既に死は覚悟している。そうして中に入っていくやがてその奥に辿り着いた。するとそこにいたのは。

まずは無数の悪霊達だった。そしてその中央に黒く渦々しく光る巨大な剣を両手に持ちそれをその不気味に宙を舞い続ける悪霊達に對して振るう紅い目の男がいた。ホークムーンは剣を振るうその男を見て二人に對して問うたのであった。

「あれが赤眼のオズワルドだな」

「そうだ。あいつだ」

「あれが赤眼のオズワルドだ」

「そうか。やはりな」

彼こそがオズワルドと聞いてまずは納得して頷いた。しかしであった。

「だが。それでもだ」

「何故ああして悪霊達と闘っているのか」

「うむ」

ホークムーンが問いたいのはそこであった。

「あれは何故だ？」

「それは俺にもわからない」

「僕にもだ」

オズワルドは決死の顔で自身の周りに漂いそうして次々に襲い掛かって来るその悪霊達と闘っていた。悪霊達は切られれば姿を消すがまたすぐに新しい悪霊が出て来て彼に襲い掛かる。そうしてその身体に少しずつだが確実に傷を付けていくのであった。

## 第七章

「あの悪霊は一体？」

「何なのだ？」

「ううむ」

ホークムーンは逆に彼等に問われて自分自身が首を捻った。そうして少し考えてからその後で彼等に対して答えたのであった。

「若しやと思うが」

「若しや？」

「心当たりはあるのか」

「何度も言うがあれはモートの剣だ」

話をそこに戻してきた。

「死を司る神のな」

「死をか」

「それだけに多くの命を奪ってきた」

だからこそ邪神として恐れられてきたのである。邪悪な神を恐れない者はいない。

「あの剣でな」

「ではあの悪霊達は」

「最早」

「そもそもあの剣は多くの悪霊達の魂を集めて作られたのだ」

今度は剣がどのようにしてできたのかも二人に対して言うのであった。

「そうしてな」

「そうか。それならば」

「あの悪霊達は」

「剣のもとになった悪霊達、モートに殺され怨念を抱いている者達」  
複数あるのだった。

「そして剣の魔力に引き寄せられてここに来ている者達もいるな」

「だからか。あの数は」

「そうであろうな」

クリスの言葉に対してこたえるたホークムーンだった。

「まだまだいるであろうな。その数は」

「そうか。ならオズワルドは」

「助かりはせぬ」

アーノルドに対してはつきりと答えた。

「最早な」

「そうか。やはりな」

「今わかったがやはりあの剣は人には扱えぬ」

ホークムーンは思慮する目で述べた。

「決してな」

「使えることができるのはモートのみか」

「そう。神であるモートのみだ」

また二人に述べるのだった。

「結局のところはな」

「わかった。では俺達には何もできないわけだな」

「当然わしにもだ」

また二人に対して言うのだった。

「持つことすらな」

「ではそれを持ったあいつは」

「あのまま悪霊達と戦い続ける」

アーノルドに説明した。

「死ぬまでな」

「死ぬまでか」

「左様。死ねばそれで終わりだ」

冷酷なまでに突き放した調子になっていた。

「それでな」

「そうか。もつともそれは自業自得だけれどな」

「そうだな」

ホークムーンの話をごここまで聞いたアーノルドとクリスもまた彼と同じく冷酷なまでに突き放した調子でオズワルドを見つつ述べた。  
「今まで散々悪事を働いてきた」

「そしてあの剣も己の浅ましい欲望の為に手に入れようとしているのは間違いないからな」

「では。このまま放っておくのだな」

「手間が省けた」

クリスの今の言葉はとりわけ冷徹なものであった。

「あの男を倒す手間がな」

「そうだな。若し一戦交えていればだ」

「あんたでも危なかったか」

「神のものだ」

邪剣のことである。

「それを相手にするとなればな。やはりわしにしろそなた達にしろ」

「さっきの話と同じということだな」

「左様。それがなくて幸いだった」

それを幸いとまで言うのだった。やはりオズワルドが悪霊達と決死の顔で戦いつつ悶え苦しんでいるのは冷酷な眼差しで見たままである。

「全く以ってな」

「そうだな。それではだ」

「もうすぐに終わるな」

オズワルドの動きが鈍くなってきた。そしてそれと共にまた攻撃を受けていく。左右からも上からも後ろからも引き裂かれその血を垂れ流していく。そうして。

片膝をついたところで一斉に襲われた。断末魔の悲鳴と血飛沫、後は何かが引き裂かれ潰され噛み砕かれていく音がした。だがそれは一瞬のこと。後に残ったのは鮮血の池とその中央に突き刺さっている黒光りする禍々しい形の巨大な剣だけであった。それだけが残っていた。

「終わったな」

「うむ」

ホークムーンはアーノルドの言葉に頷いた。

「終わりは呆気ないものだったな」

「そうだな。オズワルドは死んだ」

「そして剣は元の場所に戻った」

クリスも言ってきた。

「たったそれだけだ」

「だが。やはり邪剣は邪剣だな」

ホークムーンは達観した声で呟いた。

「見るのだ。あれを」

「むっ!？」

「剣が血を吸っている」

ホークムーンの言う通りであつた。それまで剣を濡らしその周りを染め上げていた鮮血は瞬く間に消えていく。剣がその鮮血を吸い込んでいたのだ。

そうしてその血を吸うと共に剣は何か得体の知れぬ音を立てていた。まるで獣が生贄の生き血を啜り歓喜の声をあげるようにだ。

「あの男の血をな」

「剣が血を吸うのか」

「おそらく血だけではない」

ホークムーンは言葉を付け加えてきた。

「その魂もな」

「そうか。魂もか」

「これでまた一つ悪霊があ剣に封じられた」

ホークムーンはここでもまた醒めた言葉になっていた。

「またしてもな」

「そうか。またか」

「そう、まただ。これでまた一つだ」

「そして元の場所に突き刺さっている」

「これまでと同じく」

「あの剣は人に扱えるものではない」

ホークムーンノ言葉は確かに冷たいものになっていったがそれ以上に龍らしい深い叡智に満ちたものであった。

## 第八章

「そして持つてはいけないものだ」

「そうだな。それはな」

「確かにな」

「持てばそれだけで破滅だ」

自分の言葉に頷く二人に対してまた述べた。

「それだけでな」

「その通りだ。それでだ」

「うむ」

クリスの言葉に対して応える。

「どうするのだ？この剣は」

「やはりここにこのまま置いておくのか」

「そのつもりだ」

ホークムーンは二人の言葉にこう答えた。

「持てばそれだけで身を滅ぼす邪剣。世に出すべきものではない」

「その通りだ。では永遠にここで」

「眠ったままか」

「また封印をしておく」

ホークムーンは述べた。

「今度は破られた先のものよりも遥かに強い封印をな」

「それがいい」

「このようなものは何があっても世に出るべきではない」

「だからだ。では洞窟の入り口にまた封印をしておく」

「ああ、わかった」

「それではな」

「まずはここを去ろう」

封印をすると決めてから二人に告げてきた。

「それを施すのはそれからだ」

「よし」

「それならな」

「願わくばこの剣が二度と世に出んことを」

ホークムーンはアーノルド達と共に剣を背にしたところでこう呟いた。

「永遠にな」

「邪剣は世に出てはならないな」

「うむ。何があろうともな」

アーノルドもクリスも彼と同じ意見になっていた。やはり彼と同じくその剣を背にしている。目だけを剣に向けて呟いているのだっ  
た。

「さて、それでだ」

ホークムーンはその二人に対してまた言ってきた。

「洞窟を出て封印を施したならば謝礼の話だが」

「ああ、それが」

「忘れていたよ」

「できればこのまま忘れていてもいいのだがな」

「それはできない相談だな」

「僕もだ」

流石に二人はそれは否定した。やはり報酬なくして冒険者なぞやつてはいられないからだ。彼等とてただ剣や魔法を持っているわけではないのだから。

「だからだ。ここは」

「約束どおり黄金や宝玉をだな」

「わかってている。それに森を無事に出させてやる」

「ほう、気前がいいな」

「謝礼だけではなくか」

「龍は気前のいい生き物だ」

ここで胸を張って言うホークムーンだった。

「それは何があっても覚えておくようにな」

「そうか。それじゃあ謝礼もたんまりとな」  
「もらうとするか」

こうしてホークムーンから今回の謝礼をしっかりと貰うことにした二人であった。だがそれでも思うことは思わずにいらなかった。しかし。今回はな」

「そうだな」

ホークムーンと共に洞窟の出口に向かいながら二人で話す。

「ああいう結果になるなんてな」

「思いもしなかったな」

「人は過ぎた力を持つてはならない」

ここでホークムーンが言った。

「人だけではないがな。そういうことだな」

「そうか。それであいつは破滅したのか」

「そういうことになる」

ホークムーンは達観した深い叡智を感じさせる声で述べた。

「過ぎた力を求めてな」

「結局のところそうか。もっともあいつはこれまでの行いが行いだったからな」

「ああ、それはあるな」

クリスはアーノルドのその言葉に頷いた。

「報いを受けたというもあるな」

「それでも。あの剣は人が持つものじゃない」

このことははっきりと言うアーノルドだった。

「絶対にな」

「そうだな。願わくば二度と誰かが手にすることがないようにな」  
「祈るとするか」

「後はわしに任せておけ」

ホークムーンは二人のその言葉に応えて述べてきた。

「もう決して外には出ないようにしておくからな」

最後に彼がこう言って洞窟を出て後は封印を施し謝礼をして終わ

りだった。彼等は何もしないで済んだが何かを見たのだった。邪剣は幸いにして世に出て騒ぎを起こすことはなかった。しかしその恐ろしさは彼等の目にはつきりと焼き付けさせその彼等の口から恐ろしさを世に広く伝えることになった。以後この剣を手に入れようと考える者もその為森に向かう者もいなくなってしまうたという。

邪剣 完

2008・12・25

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5504g/>

---

邪剣

2010年10月8日15時49分発行